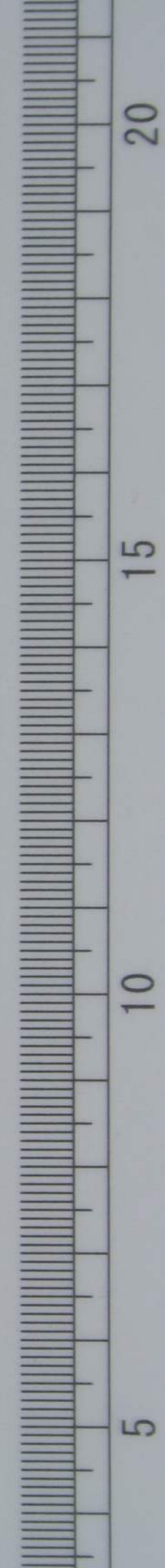
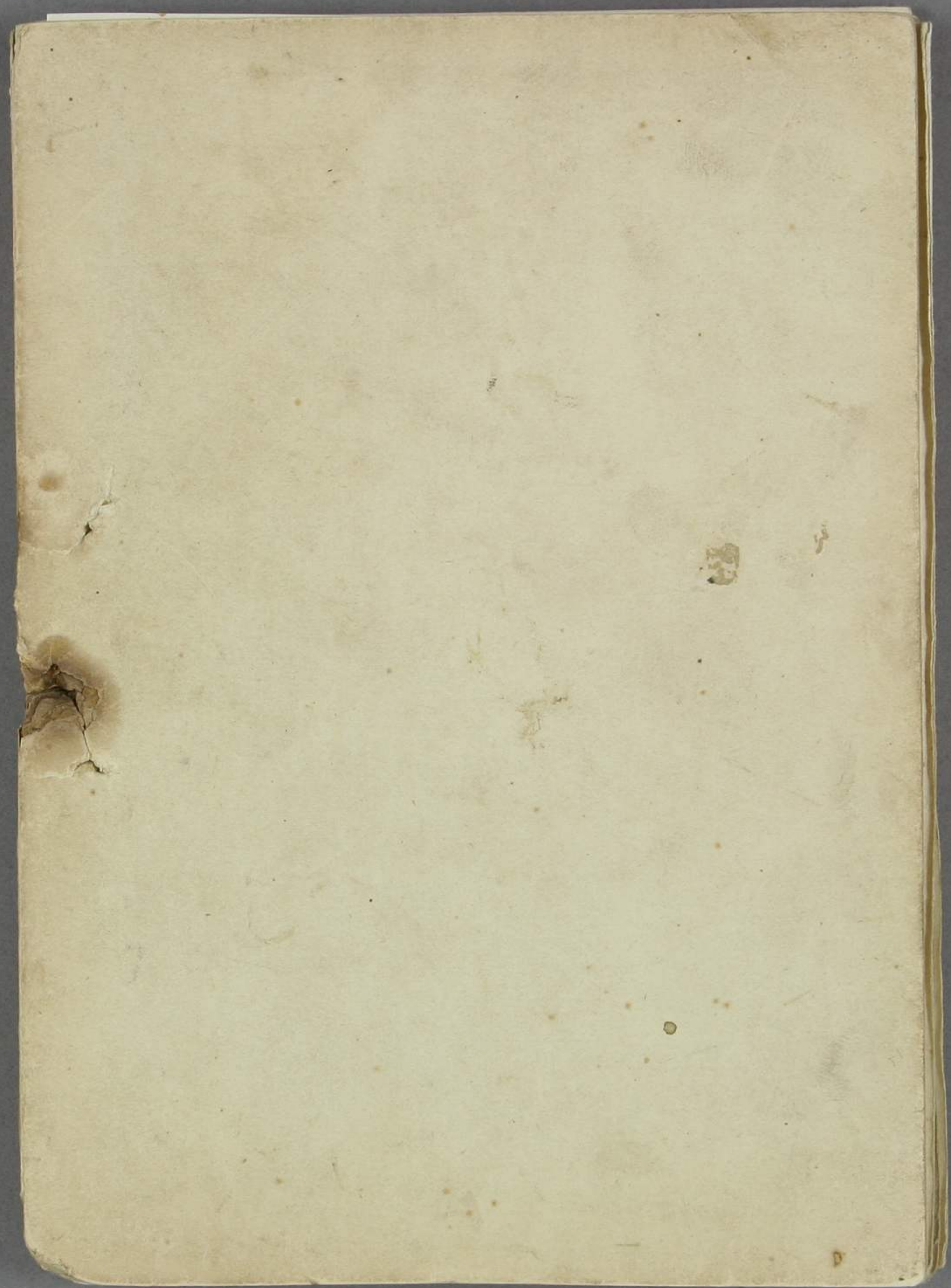
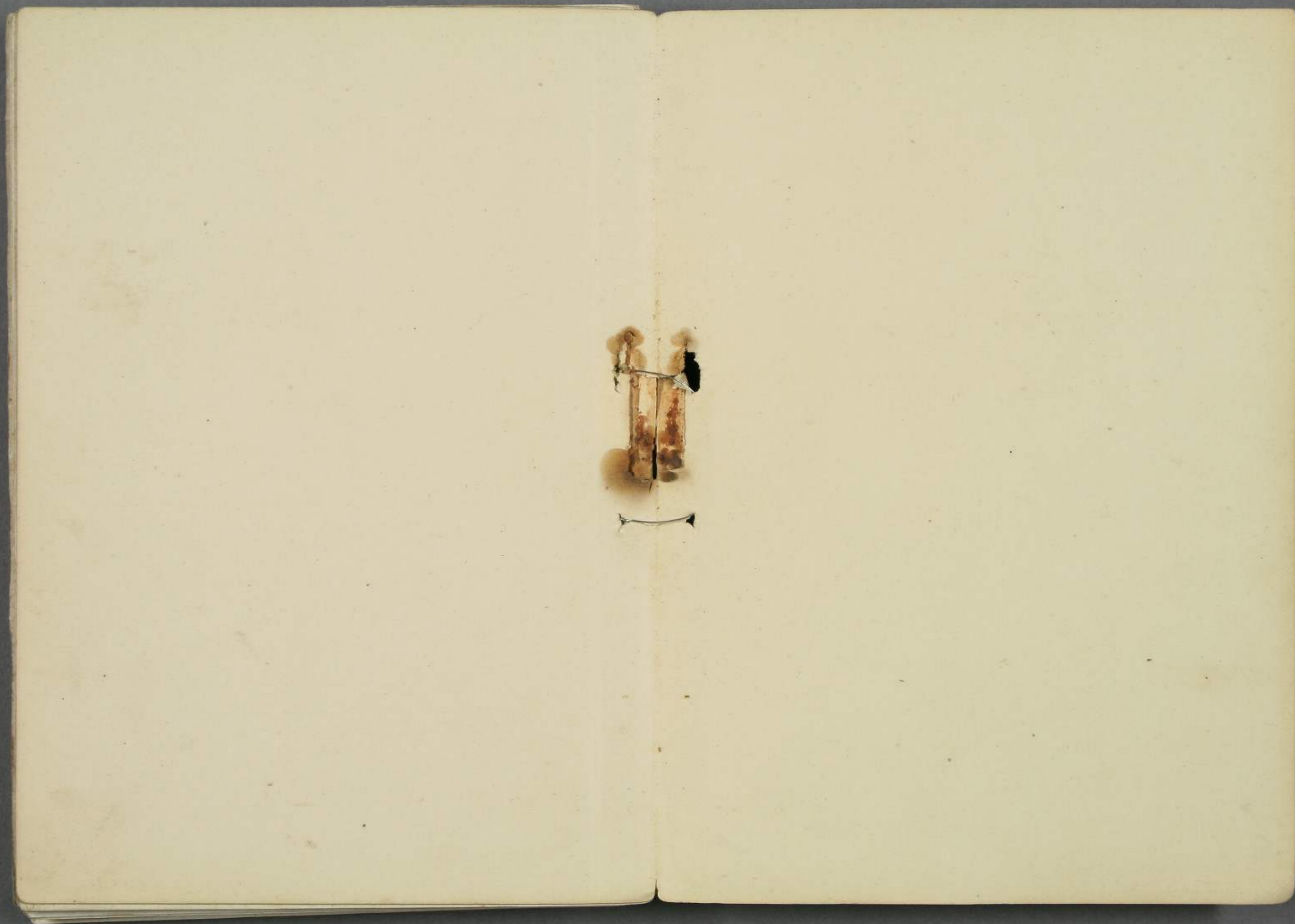


香露









岩野泡鳴著

雲路

無天詩空屋藏版

草の葉には加なく消ゆる露じもを

かたみに置きて秋の行くらん

金葉集

露 じ も 目 次

秋の蜻蛉及其他

秋の蜻蛉に寄す……………一

湖上を渡り艱みし蜻蛉に寄す……………一一

嬰兒生誕の聲を聽て……………一九

亡兒の寫真に題す……………二四

三歳の南天……………三〇

蜘蛛、蜂、少女……………三六

湖上の月……………四三

孤兒……………五三

夕立の歌……………六〇

悲哀の人を慰むる辞……………六八

十音詩

富士川……………七七

自然……………八〇

故郷の秋……………八二

歳の暮……………八三

落葉……………八五

藪鶯……………八六

野百合……………八八

寐釋迦の渡……………九〇

露 霜

西行庵……………一一八

秋風……………一二〇

盛春の歌……………一二三

春の思……………一二五

夏野にて……………一二七

茄子賣……………一二八

常世にも我はあり……………一三〇

磐城の山中にて雪に道を失ひし時……………一三三

鷺の歌……………一三六

乙女……………一三九

わが稚き弟を遺して母の身まかりし時……………一四二

失戀の人に代りて詠める……………一四三



無花果の落るを見て世の終を觀す……………一四五

移り行く世……………一四九

某嬢に贈る……………一五一

猪苗代湖……………一五三

水島灘を渡りて詠める……………一五五

朝顔……………一五六

岸の藤波……………一六〇

こがねの指輪……………一六一

浪子の戀……………一六五

月夜物語……………一六七

小督……………一七二

吾妻山雜詠……………一七七

山を望みて……………一七七

高湯にて……………一七九

細谷川……………一八〇

烟の柱……………一八二

葎の露……………一八四

外國人に別る……………一八六

松島雜詠……………一八九

富山に登りて……………一九九

詩人と鶯……………一九一

大風の夜に……………一九二

寺僧におくる……………一九三

蟻に寄す……………一九三

船頭唄……………一九五

硯の水のこぼれる時……………一九六

君は明日より……………二〇〇

野邊の夕暮……………二〇一

短 歌……………二〇三

俳 句……………二〇七

十字架のかけ……………二二三

# 露 じ も

岩野泡鳴 著

秋の蜻蛉に寄す。

この世の塵に染まざれば、  
 もとよりぬぐふ肌はだをさす、  
 人のちやみを知さなくに、  
 敢て負ふべきおも荷をし。

濁りて成りし荒がねの  
 土に思ひの根は絶えて、

あめも開けぬそのかみの  
聖き御靈を分けにけん。

瑞籬古りし御やしらの  
鏡にうつる舞のこど、  
ゆかしくまどふ羽衣の  
いで立かるき身あれども。

天津乙女の下る時

ふるてふ花の樂もあく、

南の岸に變ずべき

龍女が玉の光見ず。

來たるに聲を立てざれば、  
いづくの客かわき難く、  
去るに跡をも止めねば、  
その行ゑをば誰か知る。

あるはいろ濃き朝雲の  
ちぎれて浮ぶ片端に、  
神のい吹きをふき入れて、  
かはりつゝある御使か。

あるは夕べの黒幕を  
四の羽がひに明け持ちて、

次第く／＼に引き延ばす。  
あまの魔<sup>ま</sup>じ物あるべきか。

いさ穂につとふ小雀の  
いとあみ繁き、日のかけを  
「時」の車のめぐるごと、  
そと打つ音も聴かなくに。  
さびしき庭のおもてをば、  
小春のひよりのとやかに、  
その飛ぶけしきあがめては、  
形ありともおもほせず。

世のものあふば、おのが身の  
うつり易きを憂ひつゝ、  
木の葉枯れ行く秋の日の  
深さあはれの見ゆべきに。  
心の色のあきがごと、  
さして悲み顯れず。  
猛きうまれの人にせば、  
その一生をあやまりて。  
胸にかゝりしおほ船の  
たのみの綱をたち切りつ。

古き衣を脱ぎ棄てて、  
深山の奥に入りしかど。

あふたの希望きはめ得て、  
浮世の關を越ゑ來たり、  
目には見ぬねどありぎぬの  
寶をつたへ弘むらん。

さはさりながふ、墨染の  
かをり妙あるきぬにさへ、  
身をしる雨は降るものを、  
そもや如何あるこのひじり。

高きさどりの力もて  
無色の天を身に越ゑつ、  
二萬由旬の底までも  
暗き迷を開きけん。

夢路の如くすき透る  
あやの眞袖のゆるやかに、  
昔を悔ゆる人間の  
涙のあと絶えて無し。

天津御國の樂みの  
たましく愛にまぎれ來て、

肌あたくかのみ光に  
姿を見せしさまあれば。

きよく輝く小胸には、  
うぶみ疑ひ結ばれず。

その麗はしき面影は、  
乙女の戀も及ばじよ。

ゆふべ誓ひし兼言も、

けさの別れにのぞみては、  
千里を隔つうつせみの、  
こゝろもとさきばかりかは。

たゞ假の世の御空には、  
うつろふかげぞ常あるを、  
如何にまことの星ありて、  
そのふるまひを乱さる。

かれは身づかふ答ふらん、  
是れ正しくも、始まら  
終ちくある大神の、  
言葉に結ぶ爲ありと。

さばれ、貴ときあきつ羽よ。  
ちが身の加く、生き死の

狭き限りをのがれ出で、  
無言の道をいたさきは、

かちたこちたに往きかひの  
羽根もわづかに一もん字、  
嘗てせまふぬいさほひに  
とこ世の秋もふるふらん。



湖上を

渡り艱みし  
蜻蛉に寄す。

昔ちがふの琵琶の海、  
浪平ふかに風和ぎて、  
治まる御世の面影を  
天に向つて示せども、  
青き底あるうろくづに  
菱の綱目の迫るごと。

しげき悲みまつはりて、  
渡り兼しか水とんぼ。

水より出でし物にして、  
その水故に艱むとは、  
世に生れ來し人々の  
この世苦む如くにて、  
尊とき釋迦が御教の  
約束とどか、如何すれば、  
淺瀬の葦を飛びかはで、  
この大わだに溺れけん。

比叡の御山は西にあり、  
近江の富士はその東、  
周圍七十五六里の  
岸邊は遠きたゞ中や、  
斯る深みをいち葉の  
浮べる舟に流れ來て、  
わが持つ權のその端に  
としまりしこそ哀れあれ。

羅綾の羽根を傾けて、  
いとゞ重げに思はれつ。  
肩より浴びし白露を



ふり拂ふべき力まし。  
しり尾引きつゝわが權を  
傳ひてのぼるその様の、  
つかれ果てゝやしほくと、  
あゝ、是れ、何の使つかひぞや。

口は同じく戸どざせども、  
色にうれひの響あり、  
姿は之も變ふねど、  
樂しき戀の光あし。  
されば見よ、わが大たい覺の  
ひじりの歩みあふはれず、

かの乙女子がより頼む  
星ありとしも患はねず。

狭き限りに限られて  
安きを得ざるものゝごと、  
かれ一いち文字のいきほひは、  
之には折れて二と成りつ。  
三界衆しやう苦、日の影の  
西に散ちけし夕ゆふばねや、  
小胸を開くすゝ風に  
漸くいきをつぎにけん。

羽根を動かし、尾を振ひ、  
 首をめぐらし、足を擧げ、  
 勢多の川べにうつ蟬の  
 殻から脱ぎ棄てしけしきもて、  
 まどへる露をふり落し、  
 既に絶たににし玉の緒の  
 いき返りたるこゝ地して、  
 いづくともなく飛び去りぬ。  
 あゝ、是れ、何の使ぞや、  
 一の聲を残しけり。  
 聴けや、われこの十餘年

相尋ねるし友垣の、  
 いつしか父を失ひつ、  
 兄はあれども、母あれど、  
 その身にすべて引き受けて、  
 をみちの腕をかこつあり。  
 花のあしたに世の子こは  
 晴れのころもを競へども、  
 月の夕べに人妻は  
 静けき宴ひんを開けども、  
 ちさけの綱つなにつちがれて  
 涙の淵に沈む身は、

身づかふこゝろ勵まして  
浮びし出でん甲斐を無み。

柳の糸のつきあくも

いきちがふふるそのいのち、

絶ゆるを待てど、さりどては、

頼るべき權のちかふめや。

かれ復また細き筆噛みて

はかちき事をいひ越せば、

われあきつ羽の御告もて、

「神に頼れ」と答へせん。

嬰兒生誕の聲を聽て。

無明の風にさそわれて、

たましく生れ落ちにけむ

木の實と見れど、飽き足らず。

萬物朽ちて、岩つきの

またわか返へるものちかふば、

魂たまてふつるにつちがれて。

あはれ、静けきあめ地の

母をこひてや、おのづかふ

浮世のこゑを泣き叫ぶ。

限りある身のふどころは

塵よりちりしものちれば、

ちほあたゝかくあふざりや。

乳房ちぢきによせて、をさあ子を

いなく心の絶たぎへぐに、

あさけはもるゝこゝ地して。

愛あいにかさしむ人の手を

はあれて、しばしねふる間まも、

わがふる里やゆめ見けむ。

玉のかんばせ麗はしく

含めるゑみのあひだより、

あまつ光のかいやきて。

ままくくを守るみつかひの

羽はひろももううすすききかかげげささへへも、

見みゆるゆるやすやすくくむむそのままああこ。

きよきうちこそさちあれや、

世のありさまのうつりあは

いく多たの迷まひひれれ來來り。

よしあししげき道みち芝しばの

つゆ 踏みわくる 苦みに、  
刹那 刹那 を 生き死をむ。

あはれ、をさち子、われもまた、  
嘗て 汝がこどもわか草の  
つみなき 芽は紅ありけむを。

心ばかりもはびこりて、  
拂ふへど まとふ つたかつと、  
その根は深く つまれつ。

おもひの家 にこもる身の  
鳴かぬかすの 聲きけば、

生れぬ先きの 戀しきを。

おきそに つちぐ玉の緒の  
あがき短き わかちちち、  
まこと一つを 血すぢとし。

假りのかたちを 顯はして、  
月日に 浮ぶ芭蕉葉の  
もろきは 人の子あるふむ。

## 亡兒の寫眞に題す。

その輝けるまをこには  
清き油を湛へつゝ、

呼べはこをたしふり向きて  
緑の玉の動くふん。

あゝ、さりあがふ、空蟬の

世をうふうへに隔てゝば、

これも昔の名残にて、

空しく似たる母はあり。

その麗はしき口びるは  
千代の春をば含みつゝ、  
抱けば上し仰ぎ見て  
ゑみの花びふこぼれあん。

あゝ、さりあがふ、幽明の  
へだて一たび生じては、  
これも常なき歎きにて、  
かたのみ似たる父はあり。

すべて兒といひ、親といひ、  
もとはあめ地二つあく、

人の心を貫ける  
誠一つを血筋にて。

あるは先ち、あるは又、  
後れてこゝに生れ來つ、  
假かりのゑにしのたまくに  
斯る名を得しものあれば。

一夜よのあふし聲もさく  
見みぬ使ひにさそわれて、  
その別わかれ行くあと先も  
曾まて定さだまるものさふじ。

あふ、さりあがふ、彼は去り、  
われは残りてあるものを。  
よみの境さかひをいづこまで  
この悲は限るふん。

静けき花のあしたには  
もろき浮世のかこたれて、  
散りにし時の姿をば  
無常の風に忍びつゝ。

さびしき雪のゆふべには  
その優やさしさの思はれて、

あどなき魂たまの行るをば  
小暗こくらき空に追ひ迷ひ。

清き月夜のあかりには  
した邊べの旅の目に見えて、

三途の川の淺瀬をば  
渡りをやめる稚兒ちごしあり。

噫あ、春は憂しとも過ぎ行かん。

噫あ、秋はつくくも移りちん。

かしこに至るそれ迄は、  
如何でか盡さんこの思。

夢には遠き影とあり、  
うつゝは近き繪とありて、  
二つの世をばさかばより  
結び合はする寫真かち。

われ嬰兒生誕の聲を聽て「人の子」なる詩を作り、曾て之を某新聞の新年附録に寄す。即ち前詩なり。後二年にして此挽歌を誦する悲境に落つ。こはわが病中になりしもの。床上身づから聲をわけて通讀を試むると數回、而して一回は一回毎に嗚咽の甚しきを覺ゆるに終る。われに悲戀の詩あり又煩悶の歌あり。或は浮薄人情の頼むべからざるを歎じ、或は天地無限の知り難きを悲む然れども、斯の如く我をして泣かしめしものは非らざるなり。嗚呼、兒、去つて何處にある。空しく二年二ヶ月の思無耶相を止むるのみ。



三歳の南天。

(をんなに代りて詠める)

三とせこのかたわが夢に  
 ひとしは深きその人の、  
 世にもやさしきおもかげは  
 このおくつきにうづもれて。  
 かしらのかたに立つ石の  
 いく夜の雨にうたれてや、  
 しめりがちあるその根をば  
 みどりの苔はおほへとも。

あはれ、ゆかしさを鹿の  
 耳ふり立てし聴きまさは、  
 今も同じきわが戀の  
 かすかちがとも通じてむ。  
 よしや口には得ぞいはぬ  
 この悲みの一ふしも、  
 かわらぬ身をば訴ふる  
 わがこと靈たまの聲をれば。  
 あゝ、假かりそめのこたへだに  
 傳へて爰にあふばこそ。

つき日の駒のあがきにも  
心残りはこればかり。

いのちと頼む君ゆゑに

忍ぶ思のたけをしも、

胸にたゝせて 疊たませて、

隠し置きてしわが晴はれ着ぎ。

つひに着かざす折あくて、

過ぎにし君がかたみかも、

いかにわが身にをさめよと、

いまはの一めたまひけむ。

たとひ互ひの言葉こそ

ちぎり交はさぬをかかれど、

死でのたび路のみちづれの

かげとやわれを見たまひし。

あるは足ふはぬわが身をば

ま一度教へたまはむと、

よみの使ひのみそばまで

招きやしけむ、ねもころに。

たもち兼たる涙より

わが目うるみしそのひまに、

君はいつしか默然と

この世のいきを引き取りぬ。

こゝろ残りはこればかり、

君がみむねも聴かきくに。

はかき占うらを南天の

種一つふにためし見つ。

「わが身にいたくねぎ事の

まことかきひてあるまふは、

三世の友をおもひ寐ねに

きみは眠ふりて居たまは、

「わが蒔く種たねのもぬいで、

二つの江だに分れよ」と、

み足のかたのつち掘りて

うづめしこどもあだかりき。

木は年毎にかひ立てど、

わかれぬ幹みきの一すぢに

わが玉の緒とほそり行き、

實をも結ばむちかふきし。

たゞうれはしき迷ひのみ、

いや増す根とは且かつ知れど、

抜くにもたへぬわがおもひ、  
 苔をひとへの冥途かき。

蜘蛛、蜂、少女。

栗の下かげすぎぐに  
 うつり縮みて、飼牛の  
 あへぎもせまる晝の日や。  
 ひかり烈しき庭の面、  
 ひしろにもゆる干梅の  
 にはひもいとと暑くして。

南の風のしめりさへ  
 蒸しのぼりけん、音をくに、  
 あをき草葉のおのづから  
 うちうち垂れし軒端には、  
 呉のはとりか、さゝがにの  
 細き糸をばかけ渡し。  
 千重に八千重にたて横の  
 ひかるあや絹肌すきて、  
 すいしき空にやどる身の  
 いとも妙あるたぐみをば、  
 わがあめ地の着くだせる

みぞの裾ともちがめてん。

爰に、たましく、一匹の

蜂は鳴きつゝ飛び來たり、

いがきの端に捕はれつ。

かもひ設けぬわざはひを

避くるとすとも、ちかくくに、

その羽も足もは動かさず。

このありさまを見すまして、

蜘蛛は忽ち飛びかゝり、

待ちしはじきを食ふはんと

こゝろばかりはあせれども、

敵のちかとの強くして

互ひに競ふから負けや。

その數いまだ何れども

わから兼ねたるまのあたり、

一もみ揉みしはすみにて

蜂のちわ目の解けにけん、

うちりの聲も苦しげに、

いのちかゝへて逃れけり。

小蜘蛛はひとり残されて、

おそれの淵にのぞむふむ。  
 高きわが巢を定めちかく  
 はせめぐりてしその末に、  
 あふたの糸をつりさげて、  
 そで垣近く舞ひ下たり。

折しも、清き小娘が  
 手洗ふ水のしづくにて、  
 苔さへ深くうるほひし  
 つは露つゆの根をよぢのぼり、  
 その葉どまろきはとりより  
 蓑虫あひぢのごと捲き閉ぢつ。

かのれ身づかふうつゆふの  
 之に籠りし程もちかく、  
 かの熊蜂は一むれの  
 徒者ナサを伴ひもり返へし、  
 もとの軒端をさまよへど、  
 ぬしちき網の懸かるのみ。  
 かすかにのべし玉の緒の  
 一すぢ残るつたひ来て、  
 かしこき仇の隠れ家かを  
 よりてたかりてつき刺しつ。  
 今日けふの恨みは晴れし空、

かそれの淵にのぞむむ。

勝どきあげて飛び去りぬ。

手摺の少女之を見て、  
よろづの主あるおは神の  
めぐみの智慧や悟りけん。  
世にもさかしき口びるの  
くれあむ結ふあひたより、  
るみの花びふこぼれけり。

湖上の月。

三五の空は澄めれども、  
長命寺山さんかげ見ぬす。  
月は夜霧をたち籠めて、  
魚鱗踊るか浪の上。  
湖上に延ぶる釣壺つばの  
先さきおのづかゝ退きて、  
押せる櫓かいの力さへ、  
及びがたなきみ光の、  
坂漕き登る一葉舟。

かそれの淵にのぞむらむ。

客は沈みて喜べば、  
仰ぎて歌ふ船頭の  
聲に憂ひの響あり。

「やよ、船人よ。ちが如く、  
手易きつとめ盡しつゝ、  
尙も悲みあるありや。

金勝山の林より

あしたの神をいで迎へ、

長等の山の谷わひに

ゆふべの君を送りつゝ、

晝はあまたの荷を載せて、

膳所や石場にいで來り、  
今はた斯るともし火の  
あかき御空を漕ぎ行きて、  
夜るの酒手を得て歸へる。」

「あゝ、是れ、君が世の外に  
たまさか遊ぶちよばこそ。  
日々に勞るゝわざとして、  
いづれ變はりしことやある、  
まして男の樂みて  
飲む盃も、わが身には、  
甘き味浮ばぬを。」



おそれの淵にのぞむふじ。

「たゞ聞き玉へ。わか家は  
 さる人々のした作り、  
 田の春秋をしきたへの  
 妻にまかせて、おのれのみ  
 三途の婆々の二の前は、  
 わが身にいでし青さびの  
 ぬぐひ難しとあきふめん。  
 もとは<sup>はな</sup>知あり、田もありて、  
 ゆたかあふねど、親々の  
 名をば僅かに傳へつゝ、  
 育て上げたる<sup>あね</sup>姉むすめ  
 お玉か行さしその先は、

大江五ヶ村勢多の郷、  
 田原藤太が唐橋と  
 共に、名高きばく打ちの  
 かしふと成りて、一たびは、  
 威勢を放つ<sup>なわばり</sup>縄張の  
 廣き子分もありしかど、  
 不義の富貴は浮き雲の  
 ためしに漏れでーげに、あはれ。  
 「一夜烈しき戦ひに  
 その身代の比叡おろし、  
 あふゆる物を傾けて

おそれの用このどよよ。

浮ぶ瀬ちくにありしかば、  
子ゆゑの闇にわればかり  
先祖の田をば賣り拂ひ、  
その重される負債をば  
免れしめしも、恩は仇—  
別にをんちを手に入れて、  
われ等の子々をかへり見ず。

「いづれ斯くある悪性の  
常とし知らばゆるさじを。  
悔むこそ、尚、おろかかれ。  
姉は三人の兒を連れて

歸り來りぬ。さあきだに、  
家に老父母、子、孫々の  
やかたを如何で養はん。  
五反の小作刈り入の  
俵を分つ四分六分、  
多きを貢ぐそのあとの  
好かふぬ年は、尚更ふよ。  
常の不足は神領の  
二座に祈りて満さんと、  
冬より春の働さも、  
櫓かいの手わざまゝあらず。

「かくもいとなき秋の日に

おそれの淵にのぞむむ。

湖水の上に浮ぶとも、  
 われは綾をすさゝ波の  
 碎けて散らふ月のかげ、  
 風にゆれずば、うへしたに、  
 家根ちく澄める御やしるの  
 わかしとも見ん。さりちがふ、  
 浮世の心動きては、  
 今は昔のしき浪に  
 苦しき末の細りつゝ、  
 われちが圓きたましひは  
 いくつくも放たれて、  
 踊り出づるとあやまたれ、

氣を取り直す一筋も、  
 底の暗きに振ひつゝ、  
 螺旋らせんの如く燃ゆる去りて、  
 残る六字の名號を  
 水に念する安心も、  
 立つるひまなき唐錦、  
 綾の錦の輝きの  
 至る所に先立ちて、  
 わが身をまどふ不思議さは  
 妻子可愛きころかき。」  
 「あゝ、いふ勿れ、船人よ。」

再び語ること勿れ。  
 けふのかのれをいそしみて  
 うへ見ぬさまの宜<sup>よ</sup>かれや。  
 秋のけしきは盡くるとも、  
 ちれば一種<sup>しゆ</sup>の光あり。」

\* \* \* \* \*

その夜、伏<sup>ふし</sup>戸<sup>こ</sup>に入りて後、  
 夢に御空の月を見ず、  
 輝くものはさゝ波の  
 碎けて散ふ影ありき。

(1) 秀郷勢多の橋に大蜈蚣を退せしを以て名あり。  
 (2) 神領村に建部神社あり二座に分る。

孤兒。

都の空を飛びかよふ  
 鳶<sup>トビ</sup>も鳥も、すみ染の  
 寐ぐふ求めて鳴き歸へる、  
 芝の御山の森かげや。

夕日の名残とゞめけん  
 木々の樹するの色づきて、  
 錦をかざす間<sup>あひだ</sup>より  
 五重の塔を見るあたり。

往<sup>ゆ</sup>き來<sup>き</sup>の人も手車<sup>てぐるま</sup>も  
急ぎて過ぐる道のべに、  
樂しき小供一ひれの  
時を忘れて遊ぶあり。

おのく猛きつは者の  
姿をよそふその身には、  
つるぎ、外套、ランドセル、  
玉も藥も備へねど、

竹の火筒を横たへて  
旅のつかれか癒すふん、

あまた散り布く葉の上の  
こゝにかしこに憩ひしが、

士官の叫ぶ一聲<sup>こゑ</sup>に  
すべては勢<sup>せい</sup>をうち揃へ、  
「進め」の合圖もろ共に  
曲れる坂を下り行く。

\* \* \* \* \*

右には高さ石垣の  
堀をへだてて立ちつゝ、  
左は低き山の根の  
墓場の末を堺にて、

人馬來去の中みちを  
二つに分つ古いてふ、

數百年のその幹は

木々の樹すゑを凌ぎつゝ。

光さへぎる大枝の

茂きかれ葉はかのうかど、

雨に先だつ蝶のどと、

ひゞく舞ひて下るあり。

\* \* \* \* \*

かの一隊のわふはべの、  
喇叭の音に吹きつれて、

あきみ正しく右ひだり、  
この木のもとを進む時。

熟して落つる銀杏の

三つ四つ二つ見てしかば、

太郎三郎留吉は

われ後れじと奪ひ合ひ。

おちじ味方の戦に、

のゝしるあれば、泣くありて、

賽の河原に鬼の子の

餌じき争ふさまありき。

折しも、茲に、おいふくの  
孫をたづねて 來りけん、  
杖つきかへて、右の手に  
いとも悪しきをつれ行けば、

次に來りしはした女は、  
軍服衣たる兒を呼びて、

「とく歸りませ、母上の  
招き玉ふ」と、引き去りぬ。

兄ちる者は又曰く、

「來れ、弟、衣手の

汝が手のうちをうち拂ひ、  
ゆふげの席せきに列らぶん。」

遊あそび敵かたきは悉たく

おのが家路につきしかど、

寂さびしきまゝに居残るが、

つぶれし實みをば拾ひろひ上げ、

あたり靜しずかに夕暮ゆふぐの

せまるも知しらず、唯ただひとり、

高たかき小枝こえだを仰あぎつゝ、

風のたよりし待まちてるあり。

夕立の歌。

その姿をばあふがねの  
 地中に深くひそめつゝ、  
 千里二千里一瞬いひんの  
 風と雲とを待てりてふ、  
 わが雷獸よ、いざ覺さめて、  
 このあめ地の戦を  
 來り迎へよ。來り見よ。  
 あはれ、そのかみ、唐土たうどの

草木もあびき伏しにけん、  
 始皇が御狩あふかくに、  
 あをき幕屋まくやを張る空の  
 一天俄にかき曇り、  
 風の足あしより刈り菰こもの  
 乱れを降ふす夕立や、  
 大雨は盆をくつ返し、  
 小犬とまどふ西東にしとう。  
 ゆきゝの人はころも手の  
 ひち笠あけて、わが家やへど  
 いそき歸りしちまたをば、  
 奈落の底ゆ掘りあばき、



縦横<sup>じやうぢやう</sup>むじん、いさづまの  
 鋭きつるぎひふめきて、  
 やみを貫くその光。  
 左にくちけ、右に折れ、  
 自由自在のいきはひを、  
 敵と味かたに千よろづの  
 森羅万象たち分れ、  
 ふとき合圖の度毎に  
 宇宙は消えつ現はれつ。  
 芭蕉裂けたる北庭の  
 窓を開いて、あがむれば、  
 立て竿<sup>さき</sup>あふぬうつせみの

人の心ものび縮み、  
 恰も神の箕<sup>み</sup>を以て  
 打ち場の麥穗<sup>むぎこ</sup>斂<sup>ひ</sup>るがごと、  
 善悪正邪かのづかふ  
 ところを分つこゝ地して。  
 思ひ起せば、その昔、  
 イスレル人がことさへぐ  
 エジプトの地をのがれ出で、  
 三月の旅をたふかひの  
 山川越えて、真草<sup>まぐさ</sup>刈る  
 シナイの荒野さまよふや、

山のふもとに陣を張り、  
 きよき境しかしこみて  
 三日三夜さの御拔しつ。  
 振旅 鬩々、静肅の  
 氣にみち満てる間より、  
 モウゼはひとり玉かつぶ  
 エホバのもとによぢ登り、  
 萬古に垂るゝ石ぶみの  
 十のおきてを賜ふ時、  
 山のいたゞき火を出し、  
 あつき煙は焚木こる  
 かまどの如く立のぼり、

喇叭の音にあふがねの  
 地のもとも震ひけん、  
 その有様をまのあたり  
 われは見るかを、この夕。  
 蓋し常なき人の世は、  
 一起一滅、いかづちの  
 ひふめく聲にうち靡く、  
 草葉の露に似たりけり。  
 まこと此世にどこしへの  
 神の御救ひをかりせば、  
 まよひに迷ふわが魂は

草葉における露にして、  
 てん地をかける夕立の  
 たゞ一鳴りにゆり落ちん。  
 見よや、こゝたに電光の  
 あかり廣がるおもてより、  
 すがたかき消す飛龍あり、  
 かゝたのあつき雲間には、  
 萬弩を隠す石火矢の  
 ねらひ正しきかけ見ゆ。  
 とゞろくと鳴神の  
 心の中にひびきては、  
 胸にかゝれる黒幕も

そのまをかより引き裂けて、  
 シオンの宮の御壇より  
 あまの御門にのぼり行く、  
 いのりの如く聴かれつ。  
 おそれかしてむ萬物の  
 居すまひ更に整ひて、  
 光をさむる久方の  
 あめ地もとに返りあば、  
 重きこだまもかのづかふ  
 そのいきほひを和らげつ、  
 やゝに消ゆ行く白妙の  
 雲より雲にとゞろきて、

常世の國にや到りけん。

悲哀の人を慰むる辭。

あはれ、わが世に空蟬の  
 はかき戀を珍めづらしみ、  
 遠く見ゆ透く青雲の  
 あふぬ望をたのみつゝ、  
 空しく抱いだくあふ玉の  
 年に誇りし人々よ。  
 あしたの野邊にむく鳥の

飛び立つ跡を踏み迷ひ、  
 夕べの空に星影の  
 きらめく見ては足惑まどひ、  
 その日その日の刻ときまるゝ  
 刹那を忘れ狂へども、  
 春の花かけおぼろげに  
 ちが組み立つる哲學は、  
 無心に浮ぶ夏雲の  
 峰と碎けて消ゆ失せつ。  
 秋の草葉にかく露の  
 情なさけけを語る友は、又、  
 檜の林に冬枯の

風どもろ共遠ざかり。  
 頭上<sup>フじょう</sup>をめぐる月と日の  
 ちまたに立ちてうそふけば、  
 おのがよろこぶ説<sup>せつ</sup>さへも  
 既にあふたのものあらず。  
 むかし戀せし乙女子も  
 人に嫁ぎて、且は又、  
 その手にゑめるま茶子<sup>ちさこ</sup>あり。  
 ひどりさすふ「ひむがしの  
 野にかぎろひの立つ見えて、  
 かへり見すれば」傾ける  
 月を悲むころこそ、

やがてわが身の上にして、  
 行ふ定めぬ雲水の  
 翁と共に「爐<sup>ろ</sup>びふきや、  
 左官」の髪に「老い」を泣<sup>な</sup>き。  
 遂にかのれを焼<sup>や</sup>き太刀<sup>たち</sup>の  
 貴とき時は失せ去りて、  
 如何に悔ゆとも、玉くしげ  
 再び矯めんすべあくに、  
 おのが愚かど世の中を  
 歎きて向ふます鏡、  
 のぞみを盗むまがつみの  
 死<sup>し</sup>に欺かれざらん爲め、

あゝ、わが友よ、心して  
 憂ひにふけること勿れ。  
 生とし生ける萬物に  
 如何で悲みあかるべき。  
 かちしみあふば、之が爲め  
 切り開くべき道ありて、  
 その高ければ高き程  
 踏み破るべき坂多し。  
 されば、常あきこの世界、  
 われとま近くまじはりの  
 刹那刹那を輪に結び、  
 流轉の鎖つぎ合せ、

之に絶りてたましひの  
 かたきあし場をよち登れ。  
 狐疑落膽の岩間より  
 眼下に見へん、海原の  
 末に廣がるちが思ひ、  
 かすみ隔てゝ玉の緒の  
 細くありとも、「朝びふき  
 漕ぎ行く舟の跡」をふで、  
 沖の潮風潮さるゐの  
 亂れ横ざる一筋や。  
 誠ある身の憂き事は、  
 雲井の如く、「夕暮の

鐘にうづ捲くひいきあり。  
あはれ、わが友、あめ地の  
かすむ中より夢さめて、  
心の耳を傾けよ。

浮世は假の笠やどり、  
小雨を過ぐる音にさへ  
合歡木の若葉は破れつゝ。  
安きを得ざるもろ人の  
こゝろ盡しは、しかすがに、  
盡きぬいのちに從ひて  
その勢を呼び返し。  
窪き場所を大水の

平ふかにするその如く、  
とこ世の道は報い來て、  
宇宙に飲くる所をし。



### 十音詩。

十音詩體はわが創始にかゝるもの、十音を以て一行を成し、三三四の誦法を以て之が標準とす。詰める音は音數に入らず、前なる音に吞み込まれるものも亦然り、二音相合せは、一音なるを勿論なり。すべて斯の如き場合には、最初の音の外は、片假名を以て記し、その獨立したる音に非ざるを示す。若し然らずして、矢張平假名を用る時は、二音に延べたるものと知るべし。漢語は特別の場合に非ざれば、一語を以て一音に數ふ。韻は、この諸詩の如くかたみに踏ましむるには、二重韻最もその効を奏するに近し。是れもと五の句、七の句の外に、一種の新體を試みしもの、未だ世評の如何を知らざる也。

### 富士川。

萬弩<sup>ゆ</sup>をつゝむ夜<sup>よ</sup>しづか

富士の雪に明けそめ、

さめし露の朝ゆか

すそ野照らすしのゝめ。

千里<sup>り</sup>もあびく白はた、

岸に並ぶ<sup>な</sup>武者源氏。

やがて廻へ<sup>ま</sup>勝ざた、

あがれ沈む<sup>は</sup>歩を轉じ。



いさむいくさ二十萬騎  
よろひの袖きよく、  
あふぬ虹も世の歡喜くわんぎ  
こぞて帶ふる矢ねびふ。

引きを張りしつよゆみ、  
いち度いちどにとど高どき  
あげばひいく野にうみ、  
答るものはよもの氣。

しづみ返る向がし、  
何を敵とたふかは。

馬を下たる岩橋、

きよき川に手洗は。

ゆみ矢八幡大菩薩、

わがかぶとに候はす。

すべてみ手のわざ待つ

きみが都遠かす。

麾下きかに從がます雄

毫もこも乱れぬいさほひ、

何にたとへ、御空を

今ぞ登る日にほひ。

自然。

拂へば散る白つゆ

消ゆ失するにはあらず、

仰ぐそふに神植ゆ

星は根掘すべからず。

雨と下たりて、くれあ

花の色にうつれば、

いと麗はしこの世界、

樂土に浮ぶうを餌ば。

流れ絶ゆるすぎ行く

その影に對する時、

人とは何ぞ、つくぐ

去って去らぬを嘆ず時。

至情は天地をつらみて、

とこしあへぞ空しき。

自然身づかす開いて、

とざらせき處戀しき。

故郷の秋。

みやこ遠く立ちいで

歸り來てしふるさと。

ふるさこの思ひで

爰に忍ぶ橋あど。

嘗て千鳥にさそわれ

いづる月のちぶく、

むねも散りし小ちがれ

いまに残る木ばし。

水は潤れてぼちやく、

泳ぎこそはやすまね、

やすらうをのとし漁者、

いはほ高し秋はね。

歳の暮。

歲月 去つてまた歸ふず、

この世にまよわが魂、

二十年ねふり覺さず、

とばに風晒かざらるまら。

晴れし露の道べに、

この形骸けいがいをば横たへ、

笑わらめば花の口べに、

朽ちば骨の白たへ。

あかば夢をまね習ふ、

暮の鳥かれぐ——

友よ、何をあざ笑ふ、

こわね寒し小ちがれ。

落葉。

乾坤寂として、靜かに、

ばん里うごく秋の氣。

神窓にあつて、まさ

人の世を觀する時。

見ぬ聲はかふく、

肉にひいき足ふはで。

庭のかれ葉はふく、

秋のうとし地獄まで。

藪 鶯。

誰<sup>た</sup>が香<sup>か</sup>ありや、うぐひす、

かせかばしくくすぶる、

春のこゝろ深き巢

かのづかふぞ飛びづる。

自由の鳥よ、あさかふ

鳴きつゝけば、わがこと

かすむ胸も居あがふ

晴れてゆかし軒ぞと。

かろく木より木うたひ、

こゑ嚶々としてめぐる。

輪廻を張りしうすふひ、

それも解けて聴ゆる。

ばん法すべてこのねの

時にどもるくごもり。

云<sup>い</sup>へて云<sup>い</sup>へぬあさけの

天地をうたふこの鳥。

野百合。

野すゑに咲く

ひめゆり、

糸も取らず、

かしがす。

雲井のゆめ

さめがて、

つゆの香かにぞ

よそほひ。

けさも散るを

いとほで、

かみやまもる、

そのさま。

むちしき物

世に無し、

朽ちて朽ちぬ

—野のゆり。

寐釋迦の渡。

人間有累不可住  
依然離別難為情

古文桃源圖

音に名高き播州の  
あゆ子さばしる揖保川を、  
龍野の里ゆのぼること  
一里ばかりの川かみや、  
深きふち瀬にかぎろひの  
岩垣高き屏風岩。

何隠くすくむ天工の  
床しきみ手のためしをは、  
之と比べむころも手の  
常陸鹿嶋のかちめ石。  
水戸烈公の世にあふば、  
またも堀りてむ石脈の  
奈落の底ゆ起れりと、  
いひも傳へて來る人の  
氣さへそば立つその形、  
二枚屏風を足引の  
やま根小高き絶頂に  
たふみ上たる奇觀あり。

川をへだてて之とまた  
 ちよめに向ふ城の山は、  
 南北朝のそのむかし  
 赤松うじの據城にて、  
 (けはしき程にあふねども)  
 之を望めば、釋尊の  
 天を仰いでいねたるに  
 さも似たりてふ山ぐみの、  
 小嵐山をかうべとし  
 すぼむところを首すぢよ。  
 またひろがりて、川はたに  
 つき出たるは右の肩。

縦一線にかしあべて  
 北につふある山脈を  
 朧とし見れば横さまに  
 ちよびいでたる山の背は  
 その八枚のあば骨。  
 自然の胸に玉の緒の  
 あひだをきざむ谷々は、  
 即ち沈思黙考に  
 肉も落ちてや窪みけむ。  
 之を寐釋迦と呼びあせし  
 その心こそ床しけれ。  
 七日八日の夕月に、



このみすがたの明ふけく  
 川瀬にうつる時はしも、  
 賤がみちれのさをさして  
 こゝを渡ふむもの皆の、  
 舟をとめてやうしばし  
 合掌すてふこのわたし。

あわ、千早振る人にして  
 見ばや貴とき寐釋迦やま。  
 そのみすがたの渡しをば  
 必ずわたるものどては、  
 龍野近在山崎の

姫路にかよふあきうどや、  
 ところの醤油素麺の  
 取り引人は常のこと。  
 日々の旅人しげしとは  
 いふにあふねど、つがの木の  
 いやつぎぐに來たるをば、  
 いとうるさしとおもへども、  
 之も浮世をわたし守  
 世わたるたつきとあきふめて、  
 柳はみどり、くれあむの  
 花は散りても根に歸へる、  
 ちがの春秋よそに見て、

かのが額による波の  
 苦勞を酒に樂しみつ。  
 酔ひの寐をこに見る夢の  
 まださめやふぬおは空や、  
 屏風岩よりあけそめて、  
 けふもおちの時刻より  
 手に取りあげてたばさぬ、  
 櫓かいのちかふおとろへて  
 ゆふ日と共にしづみ行き、  
 寐釋迦のかしふにたそがれの  
 雲立ちわたる頃までも、  
 このおやぢめがぶつくと

ばやきをがぶの念佛は、  
 たゆるひまこそ無かりけれ。  
 或日、おやぢは樂みの  
 徳利つぎかへ飲みはして、  
 ちほもの足ふぬ酒の香の  
 酔ひはあせたる水ぐるま、  
 めぐりめぐらぬ不興さに  
 身を投げ入れし床のうち、  
 つかれをのぼす腰ゆみの  
 甲斐なきねふりむさぼれど、  
 いともいざときさ夜あかに、

しばくさむるまぼろしの  
 まちこを上げてうかへば、  
 やれ窓うがつぬば玉の  
 月かけ低き青柳や、  
 青き光に靡きつゝ  
 江だ葉のそよぐあふちくに、  
 一さては、この程落ちそめし  
 秋田の水かさまさりてや  
 清きこの瀬にさわぐむ。  
 さりとて、斯る水音は、  
 この年つきを住みおれし  
 わが身にさへもいぶかしと、

西のむしろ戸おし明けて  
 暗き樹かげにいで立てば、  
 ゆふべつあざしわが舟の  
 いつしか解けて、川瀬をば  
 流れの葦のそよくと、  
 吹かれてたわむ腰ぼその  
 龍女のみこと乗りたまひ。  
 すがる懼さへおのづかふ  
 聲するかたに傾むきて、  
 ひそかに仰ぐ人間の  
 ありとも知ふで、ひたすゝに  
 聴きはれ玉ふその聲は

まさしく笛のひびきあり、

「二十三夜は三日月の

でとも夜中の黒き空、

光を圍むかぎりひの

屏風岩かもみち飲んで、

しろがねあがす浪の上。

あかくうつろふ久方の

弘誓の舟に、玉かつふ

千葉のかつふのさを立て、

寐釋迦のすめるみすがたを

夜すがふまもる川姫よ。

龍の都の流れにも、

斯る貴とき瀬やはある。

龍の都の川瀬にも、

斯る清けき淵やある。

夜風にかをるさいきみの

花はくだけて散りゆけど、

また咲きそろふそのひまの

よどみ深めてます鏡、

みすがたのみはとこしへに

佛の御國照ふすあり。

夜ちく之をもち玉ふ  
いましのつとめかしこしや。

樹だちをまもる山彦の  
 われはうらやみうらやみて、  
 あこがれいづるわが魂を  
 この月かけに歌ふあり。  
 あこがれいづるわが身をば、  
 このみひかりに掠むあり。  
 かくしも遠く聴え来る  
 その笛のねに引かれつゝ、  
 ともべに立てる川姫の  
 神はおのづと下だり行く。  
 流れましろきしろがねの

岸の葦間をおし分けて、  
 このおやじめの見えかくれ  
 あと追ひせむとするまへに、  
 谷かけ暗きむかつ尾の  
 高きところゆこゑありて。  
 「姫よ、いづこへ、笛のねの  
 ぬしは尾のへのこゝにあり。  
 天のつるぎの刃も欲けて  
 御空かすむる月かけに、  
 わが持つ斧とその音を  
 射おくる月のかたちもて、  
 樹かけをまもる山彦の

神とぞわれを知りねかし。  
 草木も眠るうし満の  
 今はいましと吾を置きて、  
 この天地の静けさを  
 領する神のあるべしや。  
 ちが川水のひいきだに  
 といめ玉はゞ、まのあたり、  
 しづみかへふむ北極の  
 星をも碎くかたかふじ。  
 いかに、ふたりは今こゝに  
 そのもち物を取りかへて、  
 ともにちふはぬいとちみそ

しばしが間こゝろ見む。」

「そはこゝろ行くことをがふ、  
 わが眷屬はかしをべて  
 みを底かづくその鱧の、  
 葦間ちづそふみぎはをば  
 離れがたきをいかにせむ。」

「さふば、佛のみ手に乗り、  
 わがかたよりぞ山たづの  
 迎へにまゐり候はむ。  
 しばし待ちね」といひ敢へず、

まこと寐釋迦のたゞむきの  
 動くと見るや、忽ちに  
 大なるみ手の延びいで、  
 山の御神はかのづかふ  
 川ばたにこそくだりけれ。  
 こゝに、み神は川姫の  
 わたし玉へるみちれ掉  
 手に取りもちて、舟のべに  
 うつり玉へば、川姫は  
 山つみよりぞ受け取りし  
 斧と弓とをたばさみて、  
 仰ぐ佛のたをこゝろ

廣きまぢかに立ちたまひ。

「さふば、山彦、さりちがふ、

長鳴鳥ながなきどりのちく時は

浮世の人の目もさめて、

見つけられむもはかふれじ。

もしも然ふば身づかふの

歸へむ道を失ふへば、

かれふのさめぬ間のみ

ちがみち棹にこゝろして、

まもり玉へ」といふまへに

次第にちむみ手につれ、

さかのぼり行く川水は、

さあがふ虹の掛け橋を  
 天にわたすに似たりけり。  
 おやぢはもとの樹かげより  
 いきを殺ろしてうかゞひつ。  
 「こはおも白し、おもしろ」と  
 心のうちに思へらく、  
 「おのが年どろあれ來たり、  
 はどく倦みしわざをしも  
 斯くめづらしみ喜びて、  
 空しく立てる山彦の  
 時を忘れてあれよかし。

やがて庭鳥うたひをば、  
 迷ひ來ふむ川姫を  
 かれもろ共にうちすゑて、  
 ことわり無くしわが舟を  
 つかふ神ども懲ふさむ」と、  
 ふとき両手をいははさす  
 かたく握ざりて待ちうけぬ。  
 斯ども知ふで山彦の  
 神は言葉を違へつゝ、  
 早や鳴きわたる久方の  
 一番どりに驚きて、



三日月のべを早川の  
 行く處に迷ふいさふね。  
 おやぢは得たりかしこしと  
 綱うちかけて引きよせば、  
 「いましはこゝをまもるてふ  
 おきちあらん」と問ひたまふ。  
 「しかり、おきちは神どもの  
 いと淺ましき戯ふれを  
 近く見きゝぞしてありき。」  
 「あはれ、さりとはしつ露の  
 こぼれて落つるをかしさよ。  
 ねだもたわくの小萩より、

たどへ散りてもどこしへに  
 残さむものを、千はや振る  
 神のこゝろは人間の  
 計り知るべきものぢ。  
 たゞわが爲めに、かの姫を  
 このうつし世のほとりまで  
 迎へ來たさば、まのあたり、  
 のぞみの物を賜はさむ。  
 斯と聽くよりおやぢめは  
 とくかは色を和さげつ。  
 「ささば御言に從ひて、  
 神の目々にきこしめす

うま酒をこそたまはふめ。  
 まこと、おきかはこのゆふべ  
 飲みにし酒の足ふかくに、  
 いのちをかばをちくの實<sup>み</sup>の  
 ちいめふれけむこちして、  
 この小夜中に至りても  
 まどろみがての折かふに、  
 いまし見てしをかりそめの  
 心やりともあさむ爲め、  
 姫もろ共にうちすゑて  
 せめ懲<sup>こ</sup>さむとおもひしは、  
 このおきちめのあやまちぞ。

許し玉へ」とかしてみぬ。

「いましが酒をたしむとて、  
 神も然りと思ふこそ  
 世の人々のたぐひあれ。  
 神にはたしめ絶えてあし。  
 強<sup>い</sup>いて望みとあるあふば、  
 この滴<sup>した</sup>を手に結び、  
 一くち飲みて行きねかし。」  
 斯くのたまひて山彦の  
 み手ある權をさしいだす、  
 その矢さきをばふりさけて

おやぢはまたも不興ふきやうげに、  
 「こはわが日々ひびにたばささぬ  
 みちれ棹さざあり。とく返へせ。  
 返へし玉へ」とのしりぬ。  
 「いさ、心して見よかし」と  
 ちほつき出すよく見れば、  
 「こはそも如何に細ほそ棹さざの  
 竹たけとちもひしふしぐは、  
 こがねの輪もて矯かどめられて  
 ひかりを放つ玉かつと、  
 絶たえて世にさきかをりさへ  
 したる露つゆにをしまれつ。

一掬いく之を飲みほせば、  
 またよくひまに全身ぜんしんの  
 血ちもやをどふん味あじを知り、  
 二たび飲めば、その昔  
 別わかれし妻つまやわが子この  
 淨土じやうどに招く聲こゑを聴きき、  
 三たびは、かれもわだつみの  
 龍宮りゆうきゆうに遊あそぶこゝちしつ。  
 かいめる腰こしもかのづかふ  
 のびしが知くかるかかに、  
 かの川か姫ひめを足引あしひきの  
 山やまかげうとき谷間やまより

おのが背あかに迎へ来て、  
前後も知らず酔ひ伏しぬ。

「あはれ、老いたる人の子よ。

安く眠りて、けふもまた、

おのがつとめに目さめよ」と

祝するこゑともろ共に、

二つの神は玉の緒の

短きかけをかき消して、

この世の外に歸へりけり。

\* \* \* \* \*

やがて庭鳥鳴き盡し、

いつしか月もとわたりて、

ちかばしうけしあけぼのや

浦芙蓉いろの朝づく日。

むかつ岸べに旅人の

呼ばふ風より驚きて、

葦の水際に目をさます、

かやぢはいとも寂しげに

舟の綱手を解きそめぬ。



つゆ霜

西行庵。

あしたの野べを行く時は  
 われ踏まざるにかすみ立ち、  
 ゆふべの空をさがむれば  
 われ追はざるに星ぞ飛ぶ。

このあめ地のかは御むね  
 はかりがたなき世の中を、  
 假りのすがたによそほひて  
 まよひしふせぐ花のかけ。

心の内の彌百土よし  
 築きあげたるこの根城、  
 いのちのあふん限りをば  
 抜くに抜かれぬそののぞみ。

やがて嵐の吹き去りて、  
 あはれ、變ふん一ひふの

かをるかをりにうち乗りて、  
魂たまはいづこに歸りけむ。

秋風。

鳥が鳴くてふ吾妻をる  
みちのく山に咲きにけむ、  
こがねを鍛きたふ白河の  
關の清水のひゞきにて、  
とぎ立てふれし「時」の鎌かま。  
目にはさやかに見ゆねども、

龍田の神はみ手にして  
あたりを拂ふ、萬物の  
枯れ行くあはれを虫のねに  
しのぶはひとり賑にぎはひつ。  
憂きを重ねるわが身には、  
こゝもうまいの宿として  
ゆめ見に堪へぬみの笠を、  
吹き通すふむ秋かせの  
故郷戀しまる木橋。

盛春の歌。

君よ、汲ますや、春の酒。

にはふ霞のいや濃きに、

あまつ御空も酔へるあり。

汲めや、汲めや、再び

若わかき時は来来ふず。

君よ、汲ますや、春の酒。

櫻の雲は地ちに満ちて、

人の心に戀浮ぶ。

酔へや、酔へや、再び

若わかき時は来来ふず。

樂たのしきけふの魂たましいの

ありがを問はと、答へてん。

花より花の上うへありと。

歌へ、歌へ、再び

若わかき時は来来ふず。

雨もいとほじ、風も吹け。

花のいのちにあすあふば、  
われも香かに咲く夢を見ん。

舞へよ、舞へよ、再び  
若わかき時は来きず。



春の思。

三十二年、盛春の頃、都なる亡兒の墓に詣で、大津に来るや、長  
等山高観音の樹は盛りなりき。東西の離隔を思ひ、過去未來  
の接續を想ふ。隱顯の思想花上を渡り行きて、遂に究むべから  
ざるなり。

花より覺むる曉の  
風につきせぬ香かを傳へ、  
花に酔ひ伏すゆふぐれの  
鐘より遠き聲を聴く。

佛の御法みのりまのあたり



浮ぶに似たるきのふけふ、  
罪と報いはいまだしも、  
こゝろは消えて春の雨。

静けき道を観すれば、  
暗き世界の現はれて、

楽しくつゞきあめ地は  
あか兒が笑ふおもてかも。

生には死あり、死には又  
いのちの影のつき添ひて、  
春の思はうつせみの

限をいでゝ、限にぞ入る。

夏野にて。

限りも知らぬあめ地の  
ひろき野中をさまよへば、  
おもひは浮ぶ白雲の  
千々にくだけてあま飛ぶや、  
軽きわが身のふる里は、  
過去か然らず、來世かあらず。  
みどりあまねきすゝ風の

つきせぬいのち呼吸して、  
 人間遂に朽ち果てず。  
 樹だちのうちの一すぢの  
 道を見とめて踏み行けば、  
 一あし毎に草の葉の  
 白露散ってこゑも無し。

茄子賣。

正午マの背の中空高く  
 とゞまりしこがねの鳥からす、

かゝやきの羽がひ廣げて  
 塵の世をいだき籠めけん。

窓のべの南も吹かで、  
 蒸しのぼるうち水あつし。  
 玉ぼこの道はかわきて、  
 遊ぶ子のかげだに見えず。

かきかぞふ十二の鍾も  
 鳴りやみし辻をめぐりて、  
 たど／＼と過ぎ行くおきき、  
 老いかゝむ腰をのばしつ。

まへうしろ二つの籠に  
取る歳をしばしおろして、  
その茄子なすのよび賣る聲も  
しちびたり、軒の下かげ。

常世にも我はあり。

日は出でよ、

日は沈む。

みそふにも

海の水、

うみ邊にも  
そふの色。

みどりの野のふはありとても、  
いづれかかのが家あふぬ。

鱈あくば、  
この手あり。

羽根あくば、  
このこころ。

天下てんかは石をまろばして、  
とまるところ是れ立ちど。

憂世には、  
坂もあり。

坂あふば、

雲懸かる。

櫻の花のあさ風に

散りても浮ぶいのちかき。

ゆふ暮に

眠る身を、

夢とこそ

人はいへ、

とこ世にも

我はあり。

磐城の山中にて。

里遠き荒山中に、

横たはる道はわかれて、

二またの小枝にとまる、

ひよ鳥の羽根をふねども。

あし引の嵐にちやむ、

みの笠をゆ手にささへて、

うち振ふ心の腰を

かたはらの石にやすめつ。  
 世の人の絶えしひろ野ゆ  
 仰ぎ見るみそふを暗み、  
 みちのくの旅のちぐさに、  
 しろたへの花舞ひ下たる。  
 うす雲はい行きかさあり、  
 くる雲は乱れちぎれつ。  
 奈落まで吹き入る風を、  
 あまつ日の聲とも聴かん。

みひかりは深く隠れて、  
 旅人の身をば照らす、  
 追ひ分けのしるしうもれて、  
 ゆくてをば示めすものありし。  
 ゆふ暮の寒さおぼへて、  
 たゞひとり立ちしあがれば、  
 その跡もつひに残らず—  
 踏み迷ふおのがかげのみ。  
 一つふにふりも積もりし  
 かほ雪のきよさみたまよ、

願くはわれを救ひて、  
 久かたのあめに負ひ行け。

鷺の歌。

浮世のわざにくづはれて  
 空しくちやむ人々よ、  
 清水流るゝいその上  
 布留野のあした、とく覺めて、  
 行くての道も薄雲の  
 霞にかけける鷺を見よ。

遠く輝く黄金の  
 羽根うち振ふ度毎に、  
 眼をめぐるわが夢の  
 八重の輪かざりふり落ちて、  
 一輪くりに照り出づる  
 清きよはひに、岩づちの  
 また若返へる光あり。  
 げにや、この鳥、飛びやみて、  
 荒山中の岩が根の  
 こいしき上にとまるとも、  
 廣野にかけける白露の  
 いろに洗ひしいきはひは、

草木を孕む満月の  
 みづくしくも滴りて、  
 晴れのいくさに出づる時、  
 ますゝ猛雄がたばさみの  
 弓矢のちかふ引き矯むる、  
 その羽がひこそ一うち  
 千ざとの風ときほふらめ。  
 あはれ、けだかき山鷲の  
 雲井にすぐふ住家には、  
 つきせぬいのち湧き出でよ  
 鳥のはね身を淨むめり。

乙女。

花の世界をわがものに、  
 笑める心の流れには、  
 あさけの影はうつれども。

月の世界をわがものに、  
 つらめる胸の深みには、  
 戀のすがたはやとれども。

浮世の嵐ひら雲を

わが乙女子は身に避けて、

あま津みかみのふどころに。

かのをさあ子の玉を得て

めづるが加く、やわらかに、

清さいのちを抱きつゝ。

わが稚き弟を残して  
母の身まかりし時。

菜の葉の床とこに生れあば、

彌生の空のすやくくと、

ゆめ見もかろき胡蝶の身。

あしたの露にそだちあば、

野もせの風に抱いだかれて、

やがてかをよむ百合の花。



あまつ御神のみどり子は

清く優しき姿して、

世の常なきを語らはず。

亡せにし母の枕邊に、

夢か、うつゝか、麗はしく

何を思ひむすそのるがほ。

失戀の人にかわりて。

去年こぞの彌生やよいの花ざかり、

ゆかしの君しいましをば、

身をすみ染の墨すみころも

着て厭きらはじと、わが園の

たのしき末を語らひて、

別れしものを。この春の

聲こゑなき嵐あらしつれなきや。

都みやこをあとに來て見れば、

わが手のうちの山川の  
 けしきに散りし花一ひと、  
 名残の夢に迷ふわが心。  
 また來ん歳はありきかど、  
 去て歸らぬ川かみに  
 ゑめる姿は浮ぶ時をし。  
 花咲けば花のかけ、  
 花散れば花のうへ、  
 五尺のかただの置きどころ、  
 とはに乱れんわが思ひ。  
 こひしき君の面影は  
 春のかそりと消え行きて、

今はいづくをふる里にせん。

無花果の落るを見て、

世の終を觀す。

風も静に、足引の  
 片山里のいちじくや、  
 花見ぬすして結ぶ實の  
 落る夕べを身に受けて、  
 この世の終まわり觀すれば

月日も光失ひて、  
 赤く熟せし星々も  
 もろく流れて、紫の  
 しり尾に光る稻妻や、  
 西に東に鳴神の  
 ひびきあまねき天が下。  
 北に南に地の上の  
 諸族の歎きつもしり来て、  
 高き山根も之が爲め  
 震ひし動くそが中に、  
 田を耕せし兩人の  
 一人は先に引き取られ、

共に白ひくをみち子の  
 一人は後に残るとも、  
 いづれかわらぬ空蟬の  
 末はあめ地二つをし。  
 かのいにしへのエルサレム、  
 淨き御城の一夜さに  
 滅ぼされけん跡のこど、  
 一つの石も石の上に  
 全くはあふぬばかりかは、  
 よろづの物の失せ去りて、  
 塵もどめぬ日こそ來ぬ。  
 たゞ是れ人の死によりて

魂たまの世界を開くごと、  
 神のちかすと勢ひは  
 斯る中にもうつろはで、  
 来らん御代の山かけや、  
 あふたの枝に柔やわかか  
 若葉含めて、やがて又、  
 夏の近さを示すらん。  
 嗚呼、われ爰にもの思へば、  
 てん地おのづと一轉し、  
 その影のみを現はさず。

移り行く世。

うつり行く世を故郷の  
 ふりしいてふに譬ふれば、  
 その幹ふとく生ひ立ちて  
 御空の風を凌ぎつゝ。

四方にひろがる大枝の  
 繁き思ひは増されども、  
 曾てその根に戯れの

夢さへ今は歸り來ず。

竹馬たけうまの友の彼此かれこれの

西に東に隔りて、

日をし營むさま見れば、

人の命も秋にして。

前も後ろも黄きなる葉の

散り敷く上に、この夕べ、

ひとりたえずむわれは早や

二十歳はたとせあまり老いにけり。

某嬢に贈る。

あゝ、わが友よ、春の日に

こゝろ動けは、花を見よ。

その香かぐはしき色も香かも、

曾て浮世のものさす。

あゝ、わが友よ、夏の夜に

風待ち詫わびば、水を聽け。

流れくって行く聲の、

遂に憂ひを語らばす。

あゝ、わが友よ、秋ふけて

悲しき時は、月に泣け。

圓き鏡の輝きて、

をんちのみさほ操 いや高し。

あゝ、わが友よ、冬ざれば、

寂しき雪を思へかし。

野山の末もつらまれて、

をんちの情けいや深し。

猪苗代湖。

口には何をもち

岩代いわしろの國、

つらめる心の

深みあるふん。

てん地も静かに

こゝに湯ゆあみす。

猪苗代のうみ、

浮世の外に、

延びでし松かけ

清き水中ゆ、

肌へをぬぐひて

われはいで來つ。

岩根に干したる

わが旅ころも

再びまどへば、

磐梯山の

いたゞきばかりぞ

あとにしづける。

その水面にのぞみ

たゞはゞ笑めば、

涼しき羽風に

松の葉散りて、

いち輪の輪より

われは乱れぬ。

水鳴灘を渡りて。

雲に漕ぎ出でし

玉島沖の、

北に捲き上ぐる

帆ばしう高み、

あを空の海に

かぢ枕かぢ。

うき寐のまぢこも

いよく覺めて、

星の林をば

縫ひ行く舟の、

旅ぢろも寒き

島々のかけ。

船頭フナトウの歌も

既に四五町、

ともべにさやげる

しう浪の音、

いち文字もんじに引く

早潮の筋。

しるく横たはる

水嶋灘の、

いとゞあふき瀬に

浮ふわが身も、

名だるるくうげか



舟の月影。

朝顔。

傾城の姿に似たる、

こころゆかしき朝顔や、

きぬぐいの恨残して、

垣根にすがる蜂の腰。

あかつきの風に吹かれて、

あやの眞袖まそでや寒かふん。

わが夢は一夜に覺めて、

たゞ瞬間しゅんかんのうす化粧。

あかね刺す、日も出でるくに、

如何ある虹の現はれし。

しと露の色にはあふで、

見よや、くれさの輪を開く。

あはれ、この花の口べに、

戀のまことを染め出で、

百年ひやくねんのいのちもつひに

消えて惜まぬ風情かき。

岸の藤なみ。

昔の流れ悠々と、  
 名残とゞむる岸の松、  
 千とせの上はひ満たしてや、  
 いまあま登るたつのごと。  
 雲は呼ばねど、水煙は  
 起さゞれども、むらさきの  
 藤をみ高しそのいきほひ。

ひそむ神もやをどるふむ。  
 まが淵<sup>がち</sup>深し深みどり、  
 あやちすうへを越わかねて、  
 あはれを知らぬわたし守<sup>もり</sup>  
 懼よこたへて仰ぐあり。

こがねの指輪。

「たふちねの母は」と問へば、  
 めの子はあとをふり向きて、

「この家のわが屋のうちに  
居まし玉ふ」と答へけり。

傾ける 賤が軒端に、

ゆふげものすと 焚き立つる  
けふりより、あは定めあき  
いのちの末や 争へる。

「ちよの實の父は」と問へば、  
あまつ御空を 指さして、  
「かしてある 清き 御園に  
旅し行けり」と 答へつゝ。

いと細き くすり指より、

こがねの指輪 ぬき取りつ。

「その折に 之をたまひて、

「あとより来よ」と のたまひぬ。

「さればこそ、母ともろ共、

逢ふべき日をば 待つあれ」と、

もの語る その者よりも、

もれ聴く人の 心かき。

げにあはれ、牧師のやもめ、

おのがひとりを守りつゝ、

たまちはふ 神をあがむる  
讃美の歌も 怠らず。

日曜の 夕べにつとふ

祈いのりの家を 歸へるさに、  
ともあへる その子の指の  
輝く見ゆる 常ありき。



自作「月中」なる  
浪子の戀と思ひ出て。

江戸の紫阿波の藍

そまる色こそ深み草、

深きうれひの瀬にいでよ、

ゆるぐ浪子のいま更に

ちげかむとても甲斐を無み。

あゝ、神よ、美みの神よ。

かのヨブの昔のそれあふで、

家代々いやくにつたはりし  
 やまひは、あはれ、罪知らぬ  
 乙女ひとり得のがれぬ。  
 花はうつろひ、もみぢ散る、  
 うつせみの世の定めなき  
 さだめとこそはあきふめて、  
 いのち一つを人の爲め  
 世の爲めのみに誓ちかへれど、  
 すぎ行く水のたへかねて  
 心は知らず迷ひけるかき。

月夜物語。

秋の夜深き中なか空そらに  
 うまれ出けむ須磨の月、  
 照らすひかりに湯あみして  
 みや人着るか松の風。  
 ねいろも白きしろがねの  
 波にやかよふ物がたり、  
 誰れとかたふむ山高み、

むかしあがふの一の谷。

二の谷さへもさねぐて、  
あざさくまなく残れども、  
連銭あし毛にまたがりて  
落ち行く人のかけ見せず。

十萬餘騎のつは者も  
島の千鳥と散り行きて、  
かくれし船の行るだに  
今はいづこに迷ふとむ。

多年の榮華一朝に  
空しくありしあと問へば、  
いさむ源氏の白旗も  
ひと夜の夢にたゞよひて。

追はれしものも追ひし身も  
あをき光のかけにして、  
院の宣旨にちびきけむ  
たま藻ひろはむ、あまの子よ。  
かれもむかしはころも手の  
真弓つき弓かたにして、

名を顯はせします雄の  
血すぢあるふむ、そのすがた。

やさしきむねのます鏡、  
みるめのそでにおく露の  
塵にまみれで、おのづから、  
人のまことはかゝやきつ。

あはれ、わが身も憂きことの  
つもりつもりてみ山あす、  
おもきたび寐のつれぐに  
いにし人ふをしのおあり。

さを歎げかひそ、さうがにの  
いとも貴とき乙女子よ。  
花にあふしの襲おそひ来て、  
玉はあさ瀬に得がたくに。

屋島のゆふ日くれあわの  
散すふ末廣ひろ名のみにて、  
壇の浦わの底あくも  
しづみ果つふむ世にしあれば。  
わが盛衰はとこしへの

海に浮べむ月の夜や、  
雲かのづかふ退きて、  
平家追討 萬古<sup>ばんこ</sup>やむ。

小 督。

あふ柴の  
馴れしたま手に弾く琴は  
秋の夜さゆる月のこゑ。

峰のあふしも  
松吹くかせも

いとゞしづみて、しみぐと  
昔しをしのぶかたをり戸、

かた敷くそでの  
つゆこそやどれ。

照りまさる

月毛の駒にむちうちて、  
雲井はるかにうへ人の

つふき迎へに  
ほだされてかも、

またつちがれし玉の緒の  
ほそきいのちは、かけまくも



あやにかしこき  
御門みかどのものを。

負おひ征そ矢やの

そよとも聴かぬよそ人に、  
相あもたうれしきぬぐの

うふみは、あはれ

をみちの果はか。

宿世のちぎり斯くまでと、

押し着せふれしすみ染の

うふひる返へせ、

いまだそまふす。

くれあむの

あかき心はつゝみかね、

もろきあみだの小夜さよまくら、

しのびくゝて

まがきのほとり

仲國の手にみち引かれー

引かれ来たまふあみがさは、

まさしく君と

いまおぼへしに。

それもまた、

みちゆめの世のゆめあれや。

嗟峨のいほりのたゞひとり、

さめてさびしき

あかつきの鉦。

抹香のけふり一すぢに

浮世をよそのつとめこそ、

いまはその身の

ちかふあるふめ。

吾妻山雑詠。

明治二十六年六月、吾妻山再び破裂す。余行て之に登る、奇観實にいふべからず。頂上に於て、偶々床しき外國人の旅行者に遇ふ。相共に旅思を語て東西に別れしが、下山の途次、再び谷川の片岨に會す。いちこの生ずるはとり、清水の落つる蔭、情眷々として又相別るゝに忍びず。遂に數里の道を福島停車場迄見送りぬ。のち所感を詠して此六篇となる。

(一) 山を望みて。

残月いまだ隠れず、

かけかすかの吾妻山、

まだきの蚊屋かや離れず。  
眠ふげ拂ふへ、かすみ散さん。

朝け浅く、ほのぼの

捲きぞあげし世の御簾みすだ

ちがめ遠きしと雲の

けふりいづこ、ほとぎす。

露の道をのり乗り

行けば、田の面民無く、

心ひとり小をどり、

駒涼しくいな鳴く。

(二) 高湯にて。

やぶれし沓くつにあし引の

山又山をふみ越えて、

胸より高くそば立ちの

山又山を抱きつゝ。

もゆる日かげを背に負ひて

片岨かたそをつたふあを蛇の、

油のあせのおも荷をば

宿のいで湯に洗ひ去り。

遠くたを引く夕暮の  
 心に浮ぶ高きのを、  
 欄干らんかん近く圍む基の  
 あや目もわかずあり行きつ。  
 ひどり伏戸ふしどに入る夢の  
 世界はいと、輕けれど、  
 覺むればもとの戀にして、  
 憂きに沈める旅路かち。

(三) 細谷川。

麓をまどふぬば玉の

夜霧の上に輝きて、  
 曾ていねざる谷川よ。  
 草木静けき頂いたけの  
 月に岩間をかすめつと、  
 そのかみ若わかき山姫の  
 姿見分けん水かゝみ、  
 千々に碎けて白がねの  
 光を流すその末は、  
 限も知らぬ天津空  
 いづこの國に至るらん。

(四) 烟の柱。

ひかつ尾をゆ遠くのぞめば、  
 あを空をささふる柱。  
 やうくに近づき見れば、  
 奈落より噴き出すけふり。  
 隠れてしいきはひふとく  
 立ち昇る末は、はびこる  
 黒雲に日を遮へぎりて、  
 焦熱をくつ返へしけん。  
 岩が根の解けてふり積む

いたゞきを踏みて、仰げば、  
 あふがねの地鳴り烈しく、  
 吹く風の柱撓しなひて。

まのあたり空くうに飛びかふ  
 おほ石のさしるひふめき、  
 いかづちと見まがふまでに  
 むふ肝は奪ひ去られつ。

われひとりわれを恐れて  
 かざ上にいさ避けめぐれば、  
 やすふかにをがむ氣ぞする

山つみの高さ姿を。

(五) 莓の露。

瀧のしづ糸を

岩まに懸けて、

いとさうやかある

観音菩薩、

すいませ玉はん

この山のかげ。

空気の流れに

肌へも透きて、

そのいろ香深き

かふくれあるの、

いちごの結べる

露のしたより。

浮世の塵には

いまだ染まらで、

わが手にうつさば

消紅や失すとも、

清きぞ盡させぬ

いのちあるらん。

(六) ひとつ國人に別る。

はるくぐと

ちみ路越<sup>ち</sup>ね、

わが國に

遊ぶ君。

いち樹のかけの流れにて、

相逢ふことの奇<sup>き</sup>しさよ。

むすめ子<sup>こ</sup>を

ふたりつれ、

もろ共に

山のぼり、

見てし烟の宮ばしふ、

ふとしき立てる岩根より、

下るにも

おちじ路、

憩ふにも

一つ蔭。

いはぬいちごの色にさへ

人の誠は現はれて、

別るゝに

別れかね、

停車場<sup>ていしやば</sup>に

見送れば、

松嶋雜詠。

(一) 富山に登りて。

八百よろづ

かぞへ盡せぬ松島は

如何なる神のうませけむ。

霞のころも、

みどりのかむり、岩もすそ、

こゝろぐに着かざりて、

帽を脱ぎしは父おやよ、  
たゞはとるむは姉の君。

そのあとに

行く人は、

みかほをば

あかふめぬ。





天地の

一つ血筋に歸ふひと、  
ともにかみ伏すおもてには、

秋の夜の

月の光を照りまさむ、  
數里すぢりの入江底清み。  
しづま弓

いにし人ふを奪ひけん  
あがめ床しき夕暮に、

いと高き

富山寺の鐘のねの  
消へ行くわれも、そのわれも、

ゆく水の

絶えずありてふ天工あまわざこそ、  
どこしへまでの詩の世界。  
目のうちに

生きて動かむ氣のするは、  
生きて動かむ氣のするは。

(二) 詩人と鶯

いばふ踏み分け訪ひ來たる  
人は絶えにしやま寺の、  
さびしきうちにもの思ふ  
庭のも近く、うぐひすの

一こゑ二こゑ三こゑ鳴く  
 聴きゆく時は、何ごととも  
 ほとくわすれ、身にぞしむ。  
 そのねにいまの我歌の  
 心はうたひ出でにけり。  
 羽根ある鳥も、無き人も、  
 まことおあじの詩の神かみゆ  
 たまを分ちしものごと。

(三)

富山に籠れる時、或夜、大風ありければ、  
 ひとりぬる富山寺の嵐聴けば、  
 身も波ぎはに飛ぶやと思はゆ。

(四)

別後、寺僧に贈るとて。  
 詩の里を夢にゑがきて見る毎に、  
 形はあふす君が撞く鐘。

蟻に寄す。

よるづの物の靈長と  
 はこり頼める人々も、  
 時し來りて死ぬる日は、  
 野山に曝ふす白骨を

かへり見る者更にちく。  
 道にこぼれて、馬牛うまうまの  
 蹄にかゝるすみれこそ、  
 却て匂ふ紫の  
 色をとゞむるこの世界。  
 いづれ定めぬ生き死の  
 さかひに住みて假の身や、  
 あるか無きかの形さへ  
 爰にありてふ名を負ひて、  
 はかり知れぬ玉の緒の  
 いのちに重くちやむらん。  
 さばれ、松虫 鈴虫の

音ねに訴ふることをくに、  
 いともちいさしく這ふ虫の  
 朝を夕をのいとちみは、  
 われを忘れぬ心かき。

船頭唄。

わしがをそこは  
 淡路の船頭で、  
 須磨や明石は

一つのかぢで、

かよひ馴れたる 濱べの千鳥。

心やさしゆて

たゆまぬ胸は、

沖の大船たせん

ゆふく走る。

おひて吹けく、

あふしも何なんの、

受けてとり舵

おもかぢぢ軽く、

まきぞ上げたる

帆ばしし高さ、

月にとけや

こよひの思ひ。

わたしし獨りぢで

松帆まつはの浦の

風と浪とに

ゆり起されて、

眠る間まさへも

かりあいわいさ。

硯の水の氷れる時  
たわむれに詠める。

「こいし」と書きて送ふんと、

机に向ひ墨すれば、

硯の水の冷江氷り、

筆のは先<sup>さ</sup>のまゝあふす。

「こい」の「こ」の字は濃く附きて、

「ころ」の「こ」にも似<sup>に</sup>かよへど、

「い」の字微かにかすれては、

「ち」の「ち」の「ち」も見ぬわかず。

「し」の字のかげの無きがごと、

われは君ゆるやせ行けど、

熱<sup>あつ</sup>さをさけの風吹<sup>ふ</sup>かぞ——

君はいつまでつれあさや。



君は明日より。

君はあすより風のどの  
 遠く歸らせ玉ふとも、  
 斯く手を取りてうち出でし  
 天津御空は一いつにして、  
 草葉にうつるその色の  
 深き露おくあしたには、  
 われと歩みしこの野邊の  
 末はる遙かあるちかひをば、

野邊の夕暮。

必ず思ひ出で玉へ。  
 たどひ相見ぬその内に  
 てん地空しく亡ぶとも、  
 絶たぬは人の人あれば、  
 世のよしあしはよしあしと、  
 ひたに頼まむとこしへを、  
 ひたに頼まむとこしへを。

白露の萩におくてふ  
 宮城野のさすふひよしや。

世を遠み、青空 高み、  
 光をば放ちそめにし  
 星一つ 動くとも見しも、  
 見しわれの 堪へぬありけり。  
 誰が魂か 紅知ふねども、  
 汝につかむ、わが身は軽く、  
 せまりくる ゆふ羽のうへに  
 のるこゝ地して。

### 短歌

故郷。

来て見れば、いてふの 枯葉 散り布きて、  
 わがふる里は 荒れにける かき。  
 地獄岳。

いつの世に うみ置れけむ、まがつみの、  
 地獄が岳に くる雲の 立つ。

寄露戀。

宮城野の 小萩が 床におく露の

しげきおもひを誰れと語らむ。

陸奥に在りし頃、舟を萬石浦に浮べしとあり。  
第六天の山かけ、廣く水面を蔽ひて、良夜却て  
月光の底くつきに迷ひ、漕ぐ人滄然としてその  
向ふ所を失ふ。此時詠める。

うろくづのへさき掠めて飛ぶ音に、  
月は澄み行く萬石が浦。

鳴門海峡、二首。

御はこもて今も探るか、わたつみの  
鳴門の瀬戸にうしはうづ捲く。

大鳴門満潮高きうづの上に、  
天津乙女も舞ひ下りませ。

夕暮に母の御墓に詣で。

空蟬の聲なき聲を聴けるかを、  
手向けのしみ陰かけ薄きあたり。

妻の「濃き薄き紫匂ふ花すみれ、濡るゝあした  
は色まさるあり」と詠るに思ひつきて。

濃き、薄き、紫もあり、あけもあり、  
みどり照りそふ朝露の色。

某におくるとて。

君は今こひ歌うたはずありにけり。  
この子人あり、彼の子稚兒あり。

在清國の友に送るとて。

むら肝の心は遠く君と行きて、



胡笛こてきに袖をぬふす夜もあり。

故郷を胡沙吹く風に忍ぶ夜は、

四百餘州も狭くやあるふん。

芭蕉葉の月と云ふ題にて。

芭蕉葉に露さし登る夏の夜の

月の光はか青ありけり。

か青ある芭蕉の廣葉引き裂けて、

月は翁のころあるふん。

江州高野村永源寺の觀楓に行き、寂室和尚の句

「飽餐白飯看青山」に因みて。

青雲の白き飯いひをば嚼かみしめて、

紅葉の色に禪味ぜんみをぞ知る。

### 十七字詩。

死に瀕せる友に送るとて。

骨一つ拾ひかねたる春野かち。

ナポレオン。

皮一重むけたか、ヘレナ島の月。

人間を。

人間を粉こなみじに碎け、空の月。

朝起して。

朝顔や眞水まみずにうつるうす化粧。

夏の夜、深き森の中にありて。  
稻妻や、闇に聲ある葉のしづく。

人情の遠ざかり易きを。

一里、二里、秋のはては 萬里の港みなとかき。

無題。

ほととぎす、身はぬけがらの夏樹立。

白骨も花咲く春の墓場かき。

雪中句案の記。

六花紛々として降り止む時を知らず、胡思綿々として  
絶ゆる期をし。ひとり途上を行いて、心おのれを忘る。  
たまく一婦人の雪中を歩む姿を思ひ出て、

大雪や足場に難む袖頭巾そでづかみ

と吟じ試みけれど、之を以て未だ雪の現在降りつゝあ  
る様を浮ふると能はず。即ち思ひ返して、乞食のあは  
れたる後かけに及び、彼も人にして、人の情を備へた  
る心をとて、

降る雪や乞食も袖を拂ひつゝ

と案じぬ。之も亦面白からず。此度は一足飛びに想像  
を逞うして、此世の外に逸脱し、

雪積むや地獄に迷ふ鬼の影

と歌ふ。此時ふと跳り出てし句あり、曰く。

降りしきる雪に亡なき兒の行ふかき。

然れども、これその寫眞に題する詩に顯はせし思想にして、われに取りては既に新しとあさず。是に句案を止めて家に歸りぬ。翌朝に至りて、又句あり。曰く、  
大雪や亡き兒を追ひし夢の跡。

高雄山の紅葉見に行きし時。

物いへば煎茶汲む子も紅葉しぬ。

三十二年十一月、地球流星の軌道を通過する頃、恰も良し、満月の夜あり。舟を湖上に浮べて、勢多川を下る。唐橋を過ぐる時、演習中の一騎兵、蹄の音高くその上を進み行くを見たり。即ち、そのかみ武士の、徹夜、屯ろする有様も思ひ出されて。

騎馬武者の綱手ひかへつ橋の月。

同夜、石山に登り、林間の鐘樓に行いて、暗中に垂下せる綱を探り、一撞ついて之を放てば、その聲空輪を引いて、明鏡のあたりに響き行くを覺へぬ。即ち、當年の源氏作者を思ひ出で一句を案じてその靈を慰む。

月のうちにありと申さん源氏の間。



# 十字架のかげ。

われ一たび懷疑のとりととなりてより、未だろの束縛を脱したり  
と云ふ能はず。曾て煩悶の餘り一詩を物して、宗教上の安心を  
得んとせしことあり、即ち此篇なり。未定稿なれど、爰に掲ぐ。  
われ今に至るも、尙十字架の光を歌ひ得ざるを愧づ。

東の奇しく照る星を  
尋ねて來たるものはみを、  
西の山の端谷ふかく  
君がをはりをかもふむ。

ほるびの道に一すぢの  
ひかり賜ふはこの死あり。  
わがクリスマスたのしむも、  
十字架ののぞみあればこそ。  
あはれ、義と愛みち足ふ  
神の化身を、末の世の  
尊ぶすべは知らず、  
いばふのかむりいたしかせ。  
つばきのしりきは飽かで、

いともいやしの刑つみに置き、  
却かへつておのがそしふるるる  
口の蜜をばよろこべり。

見よや、野べには草も、木も、  
かすめる山も、行く水も、  
みち麗はしくあるものを。  
人の心の底暗み、

義ちふぬ道に蹈たふみ迷ふ。  
若し人にしも魂たまちくば、  
自然の國に物もののこど

無爲の御つかひをりけむを。

あまつ御かみのこの攝せつ理り  
はかり知ふれぬ世の中に、  
かねてそちはる自由をば  
まげて行ふつみの子ふ。

年に刈ふる草よりも、  
年に散りゆく花よりも、  
ちほ定めちかくかれ落ちて  
たゞよひ浮ぶ葉の如し。

いづくの海に流れんか、

岸に着かんか、旗はたすゝき、  
ほろびにおのがたましひの  
弔たづね禮らい行くをちがめつゝ。

よわくおろかのまよひより  
しこつ悪魔の手に落ちて、  
かげよりかげし追ひうつり、  
義のひかりをばいや避けつ。

シナイとゞろく雲のまに  
受けしおきてもます鏡、  
隠くるゝつみをおはやけの

日にあふはせしのみをれば。

身づかふ之を口にして

黒きすがたし飾るとも、

布引山の雉の尾の

「ちがきいのり」は空しくて。

ふるまひの席、會堂の

高座たかさに、やもめやむを等が

うやまひ受る、學者がくしやと

いかあるへだてあるべきぞ。

パリサイ人のいづる時  
着くたすころもむらさき紫が、  
かゝる奥の間おく深く  
悔ゆる心をこゝろせよ。

あめとつちとはすがの根の  
根より異なる木と竹や、  
接ぐによしなきあひだをば  
やはらぐる者し待つべきを。

曲れる「われ」のちかふもて  
悟り行かんとあせるとも、

尙もどおほふむふ雲の  
いつはりのみは免れず。

眞の道の御救ひに  
入らぬ限りは、むふ鳥の  
朝を夕をの起きふしに、  
やすふひまのあるべしや。

あはれ、はかなき人間の  
一萬三千五百いき、  
刹那にきさむ苦みの  
ほのほどありてのぼるとも。

その日その日の罪業の  
消ゆるのぞみを失ふは、  
こころの駒の荒れいで、  
身をも人をも踏みにじり。

「まむしの末」の世を擧げて  
互ひにそしり憎ましめ、  
うぶみを越えてうぶみさくば、  
冷より冷にひねや行き。

狐疑より狐疑をうまされば、

失望落膽盡き敢へず。  
いはほに立ちて偽善者の  
そふ飛ぶ鷲に向くを見よ。

螳螂の斧あぐるとも、  
鳥の鋭きくちばしは  
うちもて返へし、うへ「白く  
塗りたる墓」はあばかれつ。

わづかにかよふ玉の緒の  
乱れ乱れしその果は、  
右に左にころも手の



頼むものなきたゞひとり。

くづげの如く浮ぶ瀬の  
 ちみに激<sup>げき</sup>して、一たびは  
 たけり狂ひしたましひも、  
 九壑つひに行きせまり。

見ゆる喉をかき裂きて、  
 てん地に叫ぶこゑ高し。

「われふれ吹けど汝<sup>な</sup>が舞はず、  
 われ悲しめど汝が泣かず。」

このあたゝかき言葉すふ  
 ひゆれば聽かん神も無く、  
 たゞ死の谷のかけ寒み、  
 血をしぼり啼くほととぎす。

八千八こゑよみちまで、  
 自由のたまの立ち迷ふ  
 くるしみこそは、十字架の  
 うつし出だせしかげあれや。

されかうべ岡月落ちて、  
 世はとこやみの明けがてに、

墓場のうちゆひじり等の  
今よみがへる聞ゆのみ。

兩の眼はありあがふ、

あやめもわかぬ道のべに

ふして待つふむ、まがつみの

サタンのしり尾おぞましも。

\* \* \* \* \*

われに誠の動きては、

暗き心はおそれあり。

いのちの露に觸れてこそ、

はじめて明る罪の後夜

あはれ、キリスト、このかけを  
白き光に照り返へせ。

よろづの物は舞ひ出ん、

よろづの民は歌ひ出ん。

つ  
ゆ  
霜終

## 跋

或人嘗てわが詩集出版の計畫あるを聽て曰へく「渠にして之を爲し得んか、至つて幸福ある者あり」と。その意おのれも之を計畫せると久しと雖も、年一年、その舊作の意に叶ふものあきに至るといふにあり。噫然り。豈然ふざふんや。時々刻々、人は進歩する者あり。况んや歳又歳に於てをや。而して尙之を爲す所以のものは、恰もかの累々たる墳墓の間に立つて、夕暮の靜肅を觀する如く、乱思胡想の形骸中にも、何となく、わが心に棄て難きところあればあり。十年このかた、わが事に當り、折にふれて、作りいてしもの、一たび世の新聞雜誌に掲載せられしを撰びて、この數十篇とある。こゝろざしは只、わが國詩界に、聊か貢獻する所あふんを望むのみ。

われ幸福ある者ありや否やを知らず。茲にこのはかき名<sup>な</sup>の自集<sup>じしゅう</sup>を終るに當り、陳ずると斯の如し。

琵琶湖畔の茅屋に於て

明治三十四年七月

著者 識

も し 露

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 著者 and 識）

明治三十四年七月三十日印刷  
明治三十四年八月一日發行

つゆ霜  
定價金廿五錢

著者兼  
發行者

岩野美衛

滋賀縣大津市上平藏町第三十七番邸寄留

印刷者

原田義圓

大津市栴屋町第卅二番屋敷

印刷所

栴屋町活版所

大津市栴屋町第卅二番屋敷

發行所

無天詩窟

東京市芝區西久保八幡町九番地二號

發賣元

東京神田

東京堂

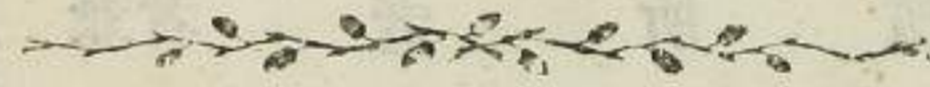
しるす。茲にこのはかきと名の自樂を

墮落仙人 (史詩)

市街戦 (悲劇)

嘉播の親 (宮古島物語)

鳴門姫上卷 (傳奇詩)



上の諸篇は既に脱稿し、數年來

著者の筐底に藏するものあり。

時機を得て、漸次出版すべし。

最も短き第三篇の如きは曾て雜

誌に掲載せられたり。

